

ウェブサイトの質に対する評価尺度の開発における予備的検討

四谷あさみ* , 鷲見克典**

愛知淑徳大学大学院図書館情報学専攻* , 名古屋工業大学生産システム工学科**

asamiy@asu.aasa.ac.jp* , sumi@system.nitech.ac.jp**

ウェブサイトはすでに重要な情報資源として普及しているが、特に日本ではその基本的な質を評価する基準の開発が遅れている。本研究では、まず情報源の評価に関する専門領域である図書館情報学で蓄積されてきた研究成果を基に、情報の信頼性とアクセスビリティの上位次元からなる、ウェブサイトの質の基準を作成した。次にこの基準を操作化した項目を作成し、尺度化(6ポイントのリカート尺度)した20項目ウェブサイト評価尺度を用いて、大学生171名に、質の違いをもたせた2種類のウェブサイトの評価させる実験を通じて尺度の予備的検討を実施した。その結果、尺度はウェブサイトの質を適切に評価でき、また人口統計的変数、ウェブサイトに関する知識/経験などによらず利用できる可能性が示唆された。

Preliminary study on development of website evaluation inventory

Asami YOTSUYA* , Katsunori SUMI**

Department of Library and Information Science, Graduate School of Letters, Aichi Shukutoku University*

Department of Systems Engineering, Nagoya Institute of Technology**

asamiy@asu.aasa.ac.jp* , sumi@system.nitech.ac.jp**

The present study is to examine individual differences in assessing the quality of websites when using a scale for website evaluation. The findings will be used in the development of the Scale itself. Our objective is to develop a simple scale which is easy-to-use and suitable for everyone, and also, to evaluate the website looking up information, called Website Evaluation Inventory (WEI). When developed, the use of the WEI will expect to eliminate the differences found among assessors. The WEI includes 20 items based on credibility of information and accessibility of the websites. Experiments assessing websites was conducted for undergraduate students (N = 171). As expected, no differences were found in the assessments using the WEI.

1. はじめに

インターネット人口は日本でも増加の一途をたどっており、ウェブサイト利用者も増大している。一方、ウェブサイトでは多種多様で、膨大な量の情報が日々提供され続けている。こうした中で、知りたい情報を得るためにウェブサイトが活用される機会は、急速に浸透し、拡大

している。

情報源としてのウェブサイトは、速報性や更新性、検索性にすぐれ、ハイパーリンク機能を生かすことが可能で、情報加工が柔軟、伝達あるいは普及スピードが高いといった特長をもち、一定の条件さえ満たされれば、知りたい情報を誰でも、素早く、手軽に得ることを可能にして

くれる有用なメディアである [1]。しかしながら、情報源としてみた場合に、オーソリティの不明瞭さ、高い不安定性、無用無益な情報過多をはじめ、信頼性の低い情報が多いといった大きな欠点がある [1]。

このようにウェブサイトは魅力的な長所と共に、重大な短所を併せもつ情報源である。しかし、問題の多い資源ではあっても、今から利用する情報源を印刷体資料やインターネット以前の電子資料のみに限定することは無意味であろう。もはや我々には、ウェブサイトを巧みに、有効に利用して、そこから求める情報を積極的に獲得していかざるを得ない状況にあるといっても言い過ぎではない。そしてそのためには、利用しようとしているウェブサイトが、知りたい情報を得る情報源として適当であると判断するための基準が必要である。つまり「調べる」ことを目的として利用する場合に、相応しい情報源であるかどうかについて評価可能な基準と尺度を確立する必要があるといえる。

「調べる」ことを目的として利用される情報源の評価に関する研究の蓄積は、図書館情報学においてなされてきている。本研究では、図書館情報学において蓄えられてきた豊富な知見を最大限に活用して、ウェブサイト評価にアプローチしていく [1]。

1.1 「調べる」ために利用されるウェブサイトの評価基準および評価尺度の必要性

ウェブサイトの評価する際には、評価をくわえる側面、性質としての評価基準と、実際に評価に用いるツールとしての評価尺度がなければならない。

現在、「調べる」ために利用されるウェブサイトの評価基準および評価尺度が求められている理由を以下に詳しくまとめる。

(1) 掲載情報の質にかかわるウェブサイトの欠点の克服

先に述べたように、ウェブサイトには誰でも、およそどんな情報であっても、事実上掲載することができてしまう。ウェブサイトの作成者が

参照可能な標準化されたガイドラインがなく、情報の掲載過程において、編集、監修、審査、出版といった「質のフィルタリング」も存在しない。これが大量の粗悪な情報、有害あるいは無益な情報の氾濫を許してしまっているのである [1]。

ウェブサイト作成上のガイドライン（たとえば、W3C など）も存在するが、これらはウェブサイトのアクセシビリティ、デザイン性、構構性を中心とした基準の提示にとどまっている。「調べる」ことを目的とした利用者にとって、掲載情報の信頼性が保証されていることが望ましいのは言うまでもない。しかし、ウェブサイト作成者が参照可能な掲載情報の信頼性に関するコンセンサスの得られたガイドラインすら、まだほとんどないのが現状である [1]。

したがって、ウェブサイトの掲載情報を有効に利用する際には、利用主体の側が掲載情報に対して適切な批判的吟味を行う必要がある。この批判的吟味のために、評価基準と評価尺度が必要なのである。

(2) インターネット・リテラシー教育における有用性

ウェブサイト評価の問題は、情報リテラシーの獲得や教育における問題の一部でもある。最近多くの学生がレポートや論文作成に際し、ウェブサイトを用いて情報を探索し、利用ようになってきた。しかし、利用しているウェブサイトが質の高い情報を提供しているとは限らない。また、「調べる」ことを目的として利用されるに相応しい、前述のウェブサイトがもつ特長が十分に生かされたウェブサイトであるとも限らないといえる。にもかかわらず、学生は自分がみているウェブサイトに掲載された情報の質について吟味せず、あるいはそのウェブサイト自体のユーザビリティなどに目を向けることがないように見受けられる。こう表現すると学生側に問題の原因を帰属できるようにとらえがちだが、実際には、ウェブサイト利用に関する教育がなされていないことに、より根本的な

問題があると考えられる。そして、さらにこの問題の原因をたどると、1つには、「調べる」ことを目的として利用されるウェブサイトが適切に評価するときに必要な基準や尺度の不在が考えられるのである。

この問題を、インターネットを通じて、求める情報にアクセスし、評価し、それを有効に利用する能力としての「インターネット・リテラシー」の教育に位置づけてとらえなおしてみたい。日本における情報リテラシー教育は、これまでコンピュータの使い方を中心としたコンピュータ・リテラシー教育が中心であった [2]。しかし、インターネット利用が一般化し、「調べる」ための情報源としてウェブサイトが社会に浸透してきた現在、「調べる」目的でウェブサイトを利用しているのは、先に例としてあげた学生のみならず、専門家から一般人まで幅広く存在している。彼らはこれまで必要な情報を得るために、主として印刷体、特にレファレンス資料を利用してきた人たちが中心である。こうした人々に対して、効力あるインターネット・リテラシー教育を受ける機会を提供することが求められると言える。ウェブサイト評価基準と評価尺度が開発されれば、それは求められる、時代に合ったインターネット・リテラシー教育に必要なツールの1つが提供されたということができよう。

(3) 情報源の批判的吟味の能力開発における意義

情報リテラシーに必要な批判的吟味の能力開発においても、ウェブサイト評価基準と評価尺度は有意義である。

情報リテラシー教育とは、さまざまな情報源から情報にアクセスし、評価し、利用する能力の獲得・向上を目指す教育である [2]。しかし、日本では、依然として一般に情報の批判的吟味についての方法の確立と利用そして教育が、あたかも忌避されているかのような状態にある。ウェブサイトを、知りたい情報が入手できる重要な情報源として認識し、これを批判的に評価

する能力の獲得が求められているといえる。

ウェブサイトを批判的に吟味するための有効なツールに相応しい評価基準と評価尺度が開発されれば、情報源の批判的吟味における教育的価値を提供する可能性をもつといえよう。

(4) 現在のウェブサイト評価基準および評価尺度が抱える問題

ところで、ここまで必要性を論じてきたウェブサイト評価のための基準と尺度は、欧米にあってはすでに種々のものが提案され、利用可能な状況にある。よく知られたものだけでも、Kapoun [3]、Grimes ら [4]によって提案された各基準あるいは評価項目、Arone らの WebMAC Senior [5]、Arone らの WebMAC junior [5]、Alexander らの Web WISDOM [6]、Cooke [7] といった評価尺度がある。しかし、残念ながらこれらの尺度は、測定学的に信頼性と妥当性の検討がほとんどなされていないのが現状である。そして、日本では、ウェブサイト評価基準や評価尺度の開発すら、まだほとんどなされてはいない。ウェブサイト評価に関する日本版の基準と尺度の開発求められている理由の1つである。

1.2 必要とされるウェブサイト評価尺度の性質

以上にまとめてきた、「調べる」ために利用されるウェブサイトに対する評価基準および評価尺度の必要性から、求められるウェブサイト評価基準あるいは評価尺度が有すべき性質を確認する。

(1) 掲載情報の信頼性が評価可能

「調べる」ことを目的としてウェブサイトを利用する個人にとって、掲載情報の信頼性の高さは重要な評価基準であろう。前述したように、たとえば、W3C など、既存のウェブサイト作成上のガイドラインが示す、デザイン性、構造的といった基準のみの評価ではなく、掲載情報の信頼性が評価できる評価基準および評価尺度でなければならない。

(2) 書誌事項を評価項目として盛り込む

タイトル,作成者/作成機関,目次,収録範囲といった書誌事項は,情報源の質を評価する際の手がかりとなる重要な情報である [1]。これらは図書や電子辞書といった,インターネット出現以前の電子資料では当然のように備えられていた事項であった。しかしながら,ウェブサイトの場合には,これらの書誌事項に不備があることが頻繁に見受けられる。したがって,作成されるべきウェブサイト評価基準および評価尺度は,書誌事項に該当する項目が評価対象事項として盛り込まれている必要がある。

(3) 求める情報や情報源へのアクセスビリティが評価可能

知りたい情報を得る者にとって,得られる情報の信頼性のみならず,そうした情報そのものもしくはそれを得ることのできる情報源へ,素早く,スムーズに到達できることが重要であろう。

こうした点でウェブサイトは,ハイパーリンク機能といった優れた特性を備えることができる。その反面,印刷体資料などと異なり,内容のすべてを手にとってブラウジングすることが困難である。したがって,利用者が求める情報そのものはもちろんのこと,情報が掲載された情報源への高いアクセスビリティが評価可能であるべきである。

(4) ウェブサイト評価の専門的知識がなくても利用可能

もはや幅広い個人が,ウェブサイトを「調べる」ために利用している。こうした人々が利用可能なウェブサイト評価尺度は,特に専門的な知識がなくても利用が可能でなければならないだろう。

(5) 簡便に利用可能であり,適度な項目数

さまざまな個人が,幅広い場面において利用することができるためには,利用方法の理解が容易であり,評価時の負担を軽くするために,評価項目数が多すぎないようにすることが必要である。

(6) 信頼性と妥当性を備えている

作成されるウェブサイト評価尺度は,評価結果が安定し,有効であるといった性質をもつ必要がある。すなわち,測定尺度として有すべき,ある程度以上の信頼性と妥当性が求められるのである。

2. 本研究の目的

本研究では図書館情報学の知見に基づき,情報源としてのウェブサイトの質に対する評価に焦点を当てる。

評価対象とするウェブサイトは,知りたい情報を求める際に,「調べる」ことを目的として利用する,広く容易に利用される無料のウェブサイトとする。評価主体は,ウェブサイト評価に関する専門的な知識のない個人を想定する。

この前提のもとで,ウェブサイトの質を評価するための,簡便で有効なウェブサイト評価尺度を作成することを最終的な目的としながら,ウェブサイト評価尺度の開発に関する予備的研究として,作成した評価尺度を使用して,ウェブサイト評価に影響を及ぼす要因を確認するための実験を行った。開発する尺度をウェブサイト評価インベントリーと名付けた。

この実験は,一般の大学生を被験者としたウェブサイト評価実験を行い,評価結果に影響を及ぼす要因(評価対象ウェブサイト,人口統計的変数,情報リテラシーに関する知識,パソコンやウェブサイトの利用経験)の確認を行うためのものであった。

なお,作成した尺度は,より広く一般に利用できることが要件であることから,上記の各要因が評価結果に及ぼす影響が認められないことが期待された。

3. ウェブサイト評価基準,評価項目および評価尺度

3.1 評価基準の作成と評価項目の選定

ウェブサイトの質を評価するための基準は,前述のとおり欧米を中心に研究されてきており,

代表的な図書館のウェブサイトには評価基準やチェックリストが掲載されている。こうした基準は、印刷体資料の評価基準にウェブサイトの特性を加味したものが中心である。

本研究では評価基準を作成するために、はじめに以下のような既存の評価基準や研究を検討した。

(1) 大学図書館で学生を対象にウェブサイトの評価を教授することを目的として作成された評価基準：Kapoun [3]，Grimes ら [4]。

(2) 年齢に応じて作成された評価基準：Arone らの WebMAC Senior [5]，Arone らの WebMAC junior[5] など。

(3) 包括的なウェブサイトの評価基準：Alexander らの Web WISDOM [6]，Cooke [7]。

(4) 日本の学校図書館で取り組もうとしている評価基準：坂井 [8]。

(5) 日本で発表された、主に学術的な情報、知識の収集に利用されるウェブサイトに対する評価基準：棚橋 [9]，吉田ら [10]。

検討の結果、「調べる」ことを目的として利用するウェブサイトの質に対する評価基準は、a. 掲載情報の信頼性、b. 情報のアクセスビリティ、といった2つの上位基準をもち、さらに掲載情報の信頼性は5つの下位基準に分類できると考えられた。

次に、信頼性の評価のための5つの基準に、アクセスビリティを加えた計6つの評価基準のそれぞれに該当する評価項目の中から、必要最小限の評価項目の選定を行った。ここでは、既存のより多くの評価基準において採用されていること、および「調べる」という利用目的に特に必要な項目を重視し、結果としての20の評価項目を選定した。

以下に、6つの評価基準と選定した20の評価項目をまとめた。

(1) オーソリティ Authority

ウェブサイトの作成者／機関が掲載情報を作成する上でふさわしい専門性と主題知識をもっている程度。

評価項目は、作成者／機関に関する名称、連絡先、所属、それぞれが明記されているか。

(2) 正確性／客観性 Accuracy/Objectivity

掲載情報もっている正確性と客観性の程度。正確性とは掲載情報が正しく、确实であり、基本的な誤りがないこと。客観性とは掲載情報が個人のもつバイアスや感情によって歪められておらず、事実に基づいているか。

評価項目は、研究やデータに基づいた掲載内容、個人的な意見や主張のなさ、誤字や脱字などのなさ、製品やサービスの宣伝目的ではないか。

(3) 収録範囲 Coverage

掲載情報が収録する情報の範囲と限界の明示、および、そうした範囲を補完する情報が提示されているか。

評価項目は、掲載内容のテーマ、引用した情報源のタイプ（政府発表、書籍、新聞など）それぞれの明記、掲載内容を補足するウェブサイトへの十分なリンク、FAQにおける丁寧な回答がなされているか。

(4) 更新性／安定性 Currency/Stability

掲載情報の更新性と安定性の程度。更新性は掲載情報の更新が適切になされていること。安定性は掲載情報やウェブサイトそのものが、ある程度安定しているか。

評価項目は、最終更新日、更新頻度、更新箇所、それぞれが明記されているか。

(5) 目的／利用対象者 Purpose/Audience

ウェブサイトの目的とウェブサイトの利用対象者が明確であるか。

評価項目は、ウェブサイトの作成目的や、利用対象者が明記されているか。

(6) アクセスビリティ Accessibility

ウェブサイトの利用者が探索する情報を、ウェブサイト内で見つけやすくする配慮と工夫がなされているか。

評価項目は、ウェブサイト内を移動しやすくする工夫（サイトマップ、サイト内サーチエンジンなど）の有無やその適切な掲載位置、ウェブ

表1 ウェブサイト評価尺度(リカート尺度)

A. 選択肢(左の数字は与える得点)	
1	まったくあてはまらない,または,掲載がない
2	あてはまらない
3	あまりあてはまらない
4	すこしあてはまる
5	あてはまる
6	とてもよくあてはまる
B. 尺度項目	
1.	作成者/機関の名前が,明確に示されている
2.	作成者/機関の連絡先が,明確に示されている
3.	作成者/機関が,信頼できる機関に所属しているか,信頼できる機関そのものであることが,明確に示されている
4.	掲載内容は,研究やデータによる,事実に基づいていることが,明確に示されている
5.	作成者/機関による,根拠の少ない主張/意見は,ほとんどない
6.	誤字,脱字,スペルミスなど,間違いは,ほとんどない
7.	ある特定の製品/サービスの購入をすすめる掲載内容は,ほとんどない
8.	掲載内容のテーマが,明確に示されている
9.	掲載内容のもとになっている情報源のタイプ(政府発表,統計データ,新聞など)が,明確に示されている
10.	掲載内容に関連し,役立つ,他のサイトへのリンクが,十分なものである
11.	F A Qにおける,回答内容が,十分なものである
12.	最終更新日が,明確に示されている
13.	掲載内容の更新頻度が,明確に示されている
14.	掲載内容の更新箇所が,明確に示されている
15.	サイトの目的が,明確に示されている
16.	利用対象者が,明確に示されている
17.	サイト内を移動しやすくする工夫(サイトマップ,サイト内検索エンジンなど)が,使いやすい場所におかれている
18.	サイトの利用方法を説明するヘルプ情報の内容が,十分なものである
19.	表示速度を落としていそうな画像/動画の掲載は,ほとんどない
20.	(サイトの利用に,特定のブラウザやブラウザ以外のソフトが必要な場合のみ回答) 特定のブラウザや必要なソフトに関する説明が,十分なものである

サイトの利用方法に関するヘルプ情報,表示速度を落とす画像や動画のなさ,特定のブラウザやソフトウェアが必要な場合にそうしたソフトウェアについての十分な説明があるか。

3.2 ウェブサイト評価尺度(リカート尺度)の作成

20のウェブサイト評価項目のそれぞれに基づいて,具体的な質問項目を作成する操作化を行った。そして,6ポイントで回答を求めるリカート法を用いてこれらを尺度化したものが,表1である。質問項目は,ウェブサイト評価に関する専門的な知識がなくても理解できる表現となるように注意した。

4. 評価実験の方法

4.1 被験者

図書館情報学,現代社会学,工学の各分野を専攻する学部生171名であった。いずれの学生もウェブサイト評価に関する基準,方法の知識はほとんど持たず,その重要性の理解も比較的浅いと考えられた。

4.2 評価対象ウェブサイト

図書館の利用方法に関する,以下の2つのウェブサイトを作成し,評価対象とした。

(1) 質の高いウェブサイト(サイトA): ウェブサイトの質を75-80%程度満たすもの。

(2) 質の低いウェブサイト(サイトB): ウェブサイトの質を20-25%程度満たすもの。

4.3 評価尺度

(1) リカート尺度(表1)

先に述べた20項目のウェブサイト評価尺度である。

(2) マグニチュード尺度

これは,ウェブサイトの質に対する全般的評価として,「まったく質が悪い」から「非常に質がよい」までで評価を求める尺度であり,リカート尺度との比較のために用いた。可能な得点範囲は0-100である。

4.4 実験手順

まず,被験者に対して,評価尺度の使い方の説明と練習を愛知淑徳大学図書館のウェブサイト(<http://www.aasa.ac.jp/org/lib/index.html>)を対象にして実施した。その後,被験者は,上記2つのウェブサイト,始めにマグニチュード尺度を用いて,次にリカート尺度を用いて評価した。また,評価順序によるバイアスを避けるために,被験者はほぼ同数の2群に分け,一方はサイトAから,他方はサイトBから評価を行った。

ウェブサイトの閲覧には15インチ液晶モニター(解像度1024×768),Netscape 4.7を用い,その他のアプリケーションとしてAcrobat Reader 4.0を使用した。

4.5 分析方法

ウェブサイト評価に対する要因の影響の有無を確認するために、各要因について、従属変数としての評価結果の統計的な有意差を、等分散性の検定結果を考慮しながらの t 検定、もしくは分散分析（一般線型モデル）を用いて確認した。なお、2 つのウェブサイトの評価順序の異なる 2 群を合わせて分析を行った。

本研究で影響を与えると考えた要因は、評価対象ウェブサイト、人口統計的変数（性別、学科）、情報リテラシーに関する知識、パソコンやウェブサイトの利用経験、である。また、マグニチュード尺度による評価結果との相違に関しても検討を試みる。

5. 結果と考察

5.1 評価対象ウェブサイトによる影響

サイト A とサイト B に関してはそれぞれ 80% 程度と 26% 程度の質の良さを示す評価結果が得られ、50 ポイント以上の違いがみられたことから、およそ想定通りであったと考えられる（表 2）。

5.2 人口統計的変数による影響

性別および学科による評価結果の違いは認められなかった（表 3 および表 4）。図書館情報学科の学生は情報リテラシーへの関心がより強いと考えられ、関連する講義を受けている。一方、工学専攻の学生はパソコン、ウェブサイトについて比較的慣れ親しんでいると考えられるが、評定に用いられた尺度はそうした影響を受けやすいと言えない結果と考えられる。

5.3 情報リテラシーやウェブサイトに関する知識による影響

情報リテラシーの知識の違いとして、大学における情報リテラシーに関する講義の受講経験による評価結果の違い（表 5）、また、ウェブサイトに関する知識の違いとして、ウェブサイトについての専門講義の受講経験による評価結果の違い（表 6）を検討したが、有意な差は認められなかった。情報リテラシーやウェブサイト

表 2 評価対象ウェブサイトによる影響（リカート尺度）

	M	SD	M の差	t 値	信頼区間
サイト A	100.38	7.88	54.70	64.18**	(53.01, 56.38)
サイト B	45.68	9.44			

**印は $p < .01$ 、信頼区間は平均値の差の 95% 信頼区間であり、() 内は信頼区間の下限と上限。以下のすべての表で同じ

表 3 性別による影響

	M	SD	M の差	t 値	信頼区間
サイト A					
男 (N=58)	100.69	8.06	.47	.37	(-2.05, 2.99)
女 (N=113)	100.22	7.82			
サイト B					
男 (N=58)	45.19	9.63	.75	.49	(-3.77, 2.27)
女 (N=113)	45.94	9.38			

表 4 専攻による影響

	M	SD	F 値	多重比較 (Tukey 法)
サイト A				
図情 (N=94)	100.54	7.59	.10	いずれの組み合わせも有意差なし
社会 (N=24)	100.63	8.57		
工学 (N=53)	99.98	8.20		
サイト B				
図情 (N=94)	44.48	8.99	1.09	いずれの組み合わせも有意差なし
社会 (N=24)	47.96	10.73		
工学 (N=53)	46.09	9.62		

図情：図書館情報学専攻の学部生、社会：社会学専攻の学部生、工学：工学専攻の学部生。

表 5 情報リテラシー講義受講経験による影響

	M	SD	M の差	t 値	信頼区間
サイト A					
あり (N=84)	100.35	8.05	.06	.06	(-2.46, 2.32)
なし (N=87)	100.41	7.75			
サイト B					
あり (N=84)	45.45	10.36	.46	.31	(-3.33, 2.41)
なし (N=87)	45.91	8.53			

表 6 ウェブサイト講義受講経験による影響

	M	SD	M の差	t 値	信頼区間
サイト A					
あり (N=59)	100.42	8.02	.06	.05	(-2.44, 2.58)
なし (N=112)	100.36	7.84			
サイト B					
あり (N=59)	45.46	9.90	.26	1.79	(-.27, 5.69)
なし (N=112)	45.75	9.10			

表 7 パソコン利用時間による影響

	M	SD	F 値	多重比較 (Tukey 法)
サイト A				
ph1 群 (N=51)	102.45	7.31	2.57	いずれの組み合わせも有意差なし
ph2 群 (N=68)	99.59	8.08		
ph3 群 (N=52)	99.38	8.07		
サイト B				
ph1 群 (N=51)	45.92	10.89	1.25	いずれの組み合わせも有意差なし
ph2 群 (N=68)	46.76	8.77		
ph3 群 (N=52)	44.04	8.70		

ph1 群：週当たりパソコン利用時間 5 時間以下、ph2 群：週当たりパソコン利用時間 6 時間以上 15 時間以下、ph3 群：週当たりパソコン利用時間 16 時間以上。

に関する、より専門的な知識の有無は、作成した尺度の利用にあたって影響すると言い難いと考えられる。

表 8 パソコン利用年数による影響

	M	SD	Mの差	t 値	信頼区間
サイト A					
py1 群 (N=102)	101.14	7.77	1.88	1.53	(-.54, 4.29)
py2 群 (N=69)	99.26	7.96			
サイト B					
py1 群 (N=102)	46.81	9.96	2.80	1.92	(-.08, 5.68)
py2 群 (N=69)	44.01	8.43			

py1 群: パソコン利用 3 年以下, py2 群: パソコン利用 4 年以上.

表 9 ウェブサイト利用時間による影響

	M	SD	F 値	多重比較 (Tukey 法)
サイト A				
wh1 群 (N=52)	101.08	8.24	.29	いずれの組み合わせも有意差なし
wh2 群 (N=63)	100.10	8.26		
wh3 群 (N=56)	100.05	7.17		
サイト B				
wh1 群 (N=52)	45.46	9.63	.84	いずれの組み合わせも有意差なし
wh2 群 (N=63)	46.83	10.34		
wh3 群 (N=56)	44.61	8.17		

wh1 群: 週当たりウェブサイト利用時間 3 時間以下, wh2 群: 週当たりウェブサイト利用時間 4 時間以上 9 時間以下, wh3 群: 週当たりウェブサイト利用時間 10 時間以上.

表 10 評価対象ウェブサイトによる影響 (マグニチュード尺度)

	M	SD	Mの差	t 値	信頼区間
サイト A	75.06	14.25	51.56	32.55**	(48.43, 54.68)
サイト B	23.51	18.23			

5.4 パソコンやウェブサイトの利用経験による影響

最近 6 か月間の週当たりパソコン利用時間 (表 7) あるいはウェブサイト利用時間 (表 9), また現在までのパソコン利用年数 (表 8) による評価結果の有意な差も認められなかった。パソコンやウェブサイトの利用経験も, 尺度の利用に与える影響は認められなかったと言える。

5.5 マグニチュード尺度による評価結果

ウェブサイトの全般的な質について評定するマグニチュード尺度による評価結果からは, サイト A とサイト B のそれぞれに対して, 75%程度と 24%程度の質の良さを示す評価結果が得られ, 50 ポイント程度の差がみられた (表 10)。リカート尺度とほぼ同様の結果であるようにもみえるが, 両尺度間のピアソン相関係数と分散説明率は, サイト A に対して .29 と .08, サイト B に対して .53 と .28 であり, さほど高くはないといえる。したがって, 両尺度による評定結果は同じであるとは言いがたい。今後詳細な分析が必要である。

6. 結論

本研究では図書館情報学における情報源の評価に関する知見と既存の評価基準を踏まえながら, 「調べる」ことを目的に, 広く利用される無料のウェブサイトの評価対象, ウェブサイト評価に関する専門的な知識のない者を評価主体として想定し, ウェブサイト評価インベントリーと命名した, ウェブサイトの質を評価するための簡便な評価尺度を作成した。この評価尺度を用いたウェブサイト評価実験の結果, 性別や専攻, 情報リテラシーやウェブサイトに関する知識など, ウェブサイト評価に影響を及ぼすと考えられた要因は確認されなかった。

本研究はウェブサイト評価インベントリーの開発における予備的検討として, 作成した尺度が属性による違いによらず, さまざまな個人によって同等に利用できる可能性を示すことを確認した。今後はこの結果をもとに, 作成した尺度の信頼性と妥当性の確認を中心に検討していく必要がある。

参考文献

- [1] 図書館情報学ハンドブック編集委員会: 図書館情報学ハンドブック, 丸善, 東京 (1999)
- [2] 野末俊比古: 情報リテラシー, 田村俊作 (編), 情報探索と情報利用, pp. 229-278, 勁草書房, 東京 (2001)
- [3] Kapoun, J.: Teaching undergrads WEB evaluation: A guide for library instruction, College and Research Libraries news (<http://www.ala.org/acrl/undwebev.html>) 2001/06/20.
- [4] Grimes, D. J. and Boening, C. H.: Worries with the Web: A Look at Student Use of Web Resources, College and Research Libraries, Vol. 62, No. 1, pp. 11-23 (2001).
- [5] Arone, M. P. and Small, R. V.: WWW motivation mining finding treasures for teaching evaluation skills grade 1-6, Linworth Publishing, Ohio (1999).
- [6] Alexander, J. E. and Tate, M. A.: Web WISDOM: How to evaluate and create information quality on the Web. Lawrence Erlbaum Associates, NJ (1999).
- [7] Cooke, A.: A guide to finding quality information on the internet: selection and evaluation strategies. Library Association, London (1999).
- [8] 坂井千晶: インターネット上の情報源の評価, 東京大学大学院教育学研究科 (編), インターネットの導入にむけて司書教諭に求められる知識と技術, 東京, 2002/01/16, 東京大学大学院教育学研究科, 東京, pp. 61-73, (2002).
- [9] 棚橋佳子: Web サイトの評価基準の開発: Current Web Contents の基準から, 情報の科学と技術, Vol. 50, No. 5, pp. 297-300 (2000).
- [10] 吉田智子, 有賀妙子: チェックリストを使った Web ページの批判的評価とその効果, 情報処理学会第 56 回 (平成 10 年前期) 全国大会講演論文集, No. 4, pp. 260-261 (1998).